

戦後を生きる女たち—J. D. Salinger の *Nine Stories* 再読

藤 田 眞 弓

Women After the War: Rereading J. D. Salinger's *Nine Stories*

Mayumi FUJITA

要 旨

J. D. Salinger の作品には、第二次世界大戦の従軍経験の直接的な言及や、戦場の生々しい描写が無くとも、戦争による、癒えることのない深刻なトラウマが表象されていることはこれまで十分に指摘され、議論されてきた。しかしながら、このような議論において注目されてきたのは戦争によるトラウマを抱える、作者 Salinger の「分身」とも解釈出来る男性登場人物たちである。

本稿では1953年に出版された *Nine Stories* の中から “A Perfect Day for Bananafish” と “Uncle Wiggily in Connecticut” を取り上げ、そこに描かれている女性たちに注目する。戦争によるトラウマと対峙する男性登場人物たちの後景に押しやられている印象がある *Nine Stories* の女性登場人物であるが、彼女たちの戦後を行き姿がどのように描かれているのかを、Salinger 生誕100周年であり、第二次世界大戦終決75年の今、考察することが本稿の目的である。

キーワード：J. D. Salinger、アメリカ小説、短篇小说、戦争文学

0. はじめに

今年2019年（本稿執筆時）は Salinger の生誕100周年ということもあり、新聞や雑誌等のメディアで Salinger の名前を目にする機会が多い一年であった。日本では、Kenneth Slawenski による Salinger の伝記 *J. D. Salinger: A Life*（邦題『サリンジャー—生涯91年の真実』）を原作にした映画『ライ麦畑の反逆児—ひとりぼっちのサリンジャー』（原題 *Rebel in the Rye*）が公開された。これに伴い、Salinger の関連書籍が映画の公開告知と Salinger 生誕100周年の記念ロゴをあしらった帯を付けられて販売されたり、書店とタイアップしたイベントが開催されたりもした。100周年の前年2018年には金原瑞人による新訳短編集『このサンドイッチ、マヨネーズ忘れてる・ハプワース16、1924年』が刊行されている。（少々大袈裟な表現ではあるが）日本における2019年の Salinger 生誕100周年を締めくくる出来事は柴田元幸編集の文藝雑誌『MONKEY』の2019-20年秋冬号が、この雑誌の前身『monkey business』（2008年秋号）の柴田元幸による *Nine Stories* 全篇新訳企画から実に11年振りに Salinger 特集を組んでいることである。

日本において生誕100周年関連の企画を機会に、（英語文学の研究者であるかどうかに関わらず）Salinger の作品を改めて、もしくは初めて手に取った人は多いのではないだろうか。筆者もそのうちの一人である。院生時代に作家の伝記的事項など全く知らずに *The Catcher in the Rye* を読み、Holden Caulfield の、大人の“phony”な世界に対する反発を表面的にだけ捉えて「これがアメリカの青春文学の金字塔か」などと月並みな感想を抱いて、それ以降 Salinger 作品を手取ることは無かった。このような状況で迎えた今年の作家生誕100周年であったが、先述した映画『ライ麦畑の反逆児—ひとりぼっちのサリンジャー』と Slawenski の *J. D. Salinger: A Life* を通して作家の伝記的事項に関する知識を持った上で Salinger の作品を読むことにより、戦後75年経った現在、Salinger 作品を「戦争文学」として読む意味を痛感した。映画では、作家 Salinger がヨーロッパの激戦地でいかに過酷な経験をしたのか、そして戦争後もどれほど戦争によるトラウマに苦しめられ続けていたかが詳細に描かれている。

第二次世界大戦の従軍経験の直接的な言及や、戦場の生々しい描写が無くと

も、Salinger のあらゆる作品に戦争による癒えることのない深刻なトラウマが表象されていることはこれまで十分に指摘され、議論されてきた。但し、このような議論において注目されてきたのは往々にして戦争によるトラウマを抱える、作者 Salinger の「分身」とも解釈出来る男性登場人物たちである。

本稿では1953年に出版された *Nine Stories* の中から “A Perfect Day for Bananafish” と “Uncle Wiggily in Connecticut” を取り上げ、そこに描かれている女性たちに注目する。戦争によるトラウマと対峙する男性登場人物たちの後景に押しやられている印象がある *Nine Stories* の女性登場人物たちであるが、彼女たちの戦後を行き姿がどのように描かれているのかを、Salinger 生誕100周年であり、第二次世界大戦終結75年目の今、考察したいと思う。

1. “Phony” な世界と “Nice” な世界

Salinger 作品を構成する二つの世界、即ち “phony” な世界と “nice” な世界については既に十二分に議論がなされてきた。Holden が許せない “phony” な世界とは、アカデミズム、映画、ショービジネス界、戦争小説、大人の権威主義など、様々である。この Holden 的 “phony” な世界と “nice” (innocent と同義) な世界は *The Catcher in the Rye* 以外の Salinger 作品の読みにも援用されている。様々ある Salinger 作品の “phony” な世界と “nice” な世界に関する論考のうち、本稿では Warren French のものを援用する。French は *J. D. Salinger* (1963) の第二章 “Phony and Nice Worlds” を専らこの問題にあてているが、この章以外でも Salinger 作品の分析にこの二つの世界の概念を用いている。とりわけ、French は、本稿で取り上げる “A Perfect Day for Bananafish” における “phony” な世界とは「物質主義的で俗悪な世界」(80) であり、“Uncle Wiggily in Connecticut” におけるそれは「物質的な快樂」(38) の世界であり、Eloise はそのような世界に屈服した女性であると述べている。

Holden が決して入りたくないと思う大人の “phony” な世界と対をなすのが “carefree” (心配、苦勞のない) で無垢な “nice” な世界なのである (120)。そして French 曰く、Salinger は明らかにこれら二つの世界の妥協はあり得ないと

信じている (44)。

2. “A Perfect Day for Bananafish” : Muriel は果たして “phony” な世界の住人か

Nine Stories の冒頭を飾る “A Perfect Day for Bananafish” は「ガラス家物語」 (“the Glass family saga”) において Glass 家の長男であり、一連の物語の中心人物でもある Seymour Glass が初めて登場し、そして自殺してしまう作品である。本作の登場人物は、Seymour 以外は皆女性であるが、その中でも本稿では彼の妻 Muriel の描かれ方に注目したい。

物語は Muriel が Seymour と訪れているフロリダのホテルで、ニューヨークに居る母との電話を交換手に繋いでもらうのを待っている場面から始まる。その間にも、彼女は雑誌の記事を読んだり、スカートのシミを取ったり、爪にマニキュアを塗る等して有効に時間を使っている。ようやく電話が繋がった時にも「電話が鳴っても一切何も中断しないタイプの女の子」(3-4) である Muriel はマニキュアを塗り、灰皿を電話が置いてあるナイトテーブルまで運ぶという一連の動作が終わるまで、電話が鳴るままに任せている。これらの行動や、Seymour の話題をしながら、突然ファッションの話題をすること (これは彼女の母が切り出したのではあるが)、そして何より夫の Seymour から “Miss Spiritual Tramp of 1948” (7) というニックネームで呼ばれていることから、Muriel は移り気で気まぐれな女性であるという印象を受ける。加えて Seymour は Sybil に妻の居場所を聞かれると、「1000くらい、彼女の居場所には可能性がある」と答えている。

“That’s hard to say, Sybil. She may be in any one of a thousand places. At the hairdresser’s. Having her hair dyed pink. Or making dolls for poor children, in her room.” (17)

Warren French は Muriel の欠点は「ゴシップ好きで、つまらないことに過度

の関心を持ち、そして何より、Rilke の詩のような偉大な、想像力の作品を顧みないことである」(French, *J. D. Salinger* 80) としながらも、Seymour が Muriel に付けたニックネーム、“Miss Spiritual Tramp of 1948” は彼女に相応しいものではなく、その理由を以下のように述べている。

She is not, however, unstable or without the courage of her convictions. From her telephone conversation, we learn that she has waited through the war for Seymour, has waited again for his release from a military hospital, has allowed him to drive against her parent's wishes, and is willing to defend vigorously both herself and Seymour from her parents' meddling. (80-81)

French の指摘通り、母親と Muriel の一連の会話を精読すると、終始 Seymour の精神状態や彼の奇行を過度に心配する母親に対して、Muriel は一貫して自分と Seymour は大丈夫であるから心配は要らないと主張し続ける。とりわけ Seymour の運転に関しては（彼に運転をさせないと Muriel は母親に約束していたのだろう）、「彼は丁寧に運転をした」(“He drove very nicely”) (6) と 3 回も繰り返している。

「Seymour が完全に自制心を失う可能性がある」(9) 故に、Muriel に帰宅を促す母親に対して、Muriel は滞在中のホテルで精神科医を見つけたこと、何年振りの折角の休暇であること、そして酷く日焼けをして動くことが出来ないことを理由に、決して直ぐには家に帰らないと主張する。これは戦場から帰還し、「あまりにも顔色が悪い」Seymour (Muriel は “he's so pale” と 2 回発言している) をそっとしておいて上げたい、ゆっくりと休ませて上げたい思い故の excuse なのではないだろうか。

母親の発言、及びそれに対する Muriel の応答にも、読者が Muriel の Seymour に対する愛情を伺い知ることの出来るものがある。

“When I think of how you waited for that boy *all* through the war—I mean

when you think of all those crazy little wives who—”

“Mother,” said the girl, “we’d better hang up. Seymour may come in any minute.” (13)

母親の発話は Muriel により遮られて途中で終わってしまっているが、恐らく戦時中多くの妻たちが戦地からの夫の帰還を待ち切れなかったり、諦めてしまったりしていた中で、Muriel は Seymour が帰って来ることを信じて待ち続けていたことを語ろうとしているのであろう。また、Muriel が母親の発話を遮ったのは、Seymour にこのような会話を聞かせたくない心遣い故なのではないだろうか。

母親との電話での会話の締めくくりに、Muriel は「私は Seymour のことは心配していない」(“I’m not afraid of Seymour.”) (14) と断言している。これは、Seymour の精神状況や奇行を過度に心配したり、怖がったりすることなく、戦争のトラウマに向き合う Seymour を支えて行く覚悟の表明と解釈することが出来ないだろうか。母娘の電話が終わると、物語はビーチに居る Seymour と Sybil の場面に移行する。

“A Perfect Day for Bananafish” を Seymour の自殺を巡る物語として読むと、戦争で心に傷を負った帰還兵が、妻に代表される大人の “phony” な世界に絶望し、“innocent” な少女 Sybil に救いを求めるも、彼女もまた、“phony” な世界の住人であり、Seymour を救済することが出来なかった物語と解釈することが出来る。しかし、従来の Sybil の人物像の解釈についても、Muriel についてと同様に疑問を呈したい。

French は精神に障害を持つ Seymour が、物語中多くの人を混乱させており、Sybil もそのうちの一人であると述べている (French, *J. D. Salinger* 80)。例えば、Seymour は Sybil の黄色い水着を青だと言ったり (17)、彼女の足首を掴んだり (18)、Sybil が話題にした “Little Black Sambo” を昨晚ちょうど読み終えたばかりだと言ったり (21)、突然彼女の足の裏にキスをしたり (22)、二人で始めた水遊びを唐突に終わらせたりする (24)。一方で、Sybil の Seymour に対する質

問は、一見唐突のように思われるが、Seymour がそれらに対して当惑することはない。むしろ、彼女の質問はまるで Seymour の “Tell me about yourself.” (18) という要望に答えるかのように、彼女自身のことを彼に教える役割も果たしている。具体的には、“Little Black Sambo” を読んだことがあるか Seymour に尋ねることによって、彼女がこの作品を読んだばかりであること、またはこの作品がお気に入りであることを、蜜蝋 (“wax”) やオリーブ、蝋燭を噛むことが好きかどうかを尋ねることによってそれらを彼女が好きであることを Seymour に伝えているのである。Sharon Lipschutz への嫉妬が “innocent” な少女らしくないと指摘されることがあるが (田中, 『ミステリアス・サリンジャー』 151)、Sybil の年齢の少女にはあり得ることであると思われる。Sybil は、母親から解放されて Seymour に会いに行く時も、水遊びを終えてホテルに向かう時も走って移動し、Seymour と海に向かう時には「左手で左足を持ちながら 2、3 回跳びはねる」(20) 元気いっぱいの少女である。その Sybil が、精神的な障害からか、Seymour が異常なまでに几帳面に海に入る支度をしているのをおとなしく待って上げているのは彼女の少女なりの気遣いや優しさの現れではないであろうか。彼女が *bananafish* を見たと言ったのも、Seymour の気を引こうとか、彼に話を合わせようとした訳ではなく、彼から *bananafish* についてあまりに詳しく聞かされた直後なので、視界の悪い水中で本当にそれを見たと思い込んでしまっただけではないだろうか。Bananafish がくわえていたバナナの数が 6 本であると即答したのも、直前まで話題にしていた “Little Black Sambo” の虎の数が 6 匹であることが頭に残っていたからではないだろうか。

以上のように Sybil と Seymour のやり取りを考察してみると、Sybil は初めて我々読者の前に姿を現した時に見せた「華奢で翼のような肩甲骨」(“the delicate, winglike blades of her back”) (14-15) や「ブロンドの髪の毛」(24) が想起させる天使のような少女として描かれていると考えることが出来るのではないだろうか。

ビーチで Seymour と Sybil が別れた後、物語の場面はホテルに、そして再び Muriel の居るホテルの 507 号室へと戻る。Seymour が部屋に戻るとそこは「新

しいカーフスキンの鞆とマニキュアの除光液の匂いがしていた」(26)。先ほど塗ったばかりのマニキュアを早速除光液で剥がしてしまっている Muriel の行動が、彼女が移り気で気まぐれな人間であることの現れだと解釈することは可能であるかも知れない(田中、『ミステリアス・サリンジャー』149)。しかし、この Muriel の行動は、爪に塗った“phony”な色を剥がし、自然な爪に戻した状態で Seymour の帰りを待つ Muriel の“innocent”な面の現れだと解釈することが出来ないだろうか。

Muriel と Sybil という、二人の“phony”でない女性(少女)の姿に触れたことが、Seymour の自殺と何らかの関係があるかも知れないが、彼の自殺の理由についての考察は本稿の目的ではないため、これ以上の推論は差し控えることにする。

3. “Uncle Wiggily in Connecticut”：Eloise は果たして“phony”な世界の住人か

Nine Stories の二作目として収められている“Uncle Wiggily in Connecticut”も前項の“A Perfect Day for Bananafish”同様、「女ばかり」の短篇小説である。いや、むしろ「女だけの」短篇小説と表現した方が正しい。物語に実際に登場するのは、Eloise、彼女の元を訪れている大学時代の友人 Mary Jane、Eloise の娘 Ramona、そして家政婦の Grace と皆女性である。Eloise と Mary Jane の思い出話には勿論、Ramona の「空想上の彼氏」(“a make-believe little boy”)(38)や Grace が Eloise に今晚泊めてやってくれと懇願している彼女の夫(Eloise の家の台所に居るが、本人が物語に登場することはない)など、彼女たちの会話にはたくさんの男性が登場するが、実際に作中人物として登場する男性は一人も居ない。

Salinger の作品世界の現在が、執筆、もしくは発表された年であることを考慮すると、1948年に *New Yorker* の3月20日号に掲載された本作は、まさに戦後を生きる女たちを正面から扱った作品だと言えるだろう。

French は *J. D. Salinger* (1963) の第二章“Phony and Nice Worlds”で、Salinger 作品における Holden 的二つの世界、すなわち“phony”な世界と“nice”

な世界（French の論では後者後者の世界は、“innocent” な世界と同等の意味で使われている）の両方を描いている唯一の作品として本作について論じている。French は本作の “nice” な世界は過去 Eloise が Walt と過ごした「牧歌的」な世界のことで、“phony” な世界とは夫の Lew と暮らす現在の世界のことであると言う。そして、Salinger 作品において本作ほどこれら二つの世界が悲劇的な対照をなしている作品はないと述べている（38）。

Nowhere in in Salinger’s writings is the contrast between these two worlds more tragically conjured up than in Eloise’s final cry to her stone-drunk college chum, “I was a nice girl, wasn’t I?”（38）

本稿は Salinger 作品の “phony” な世界と “nice” な世界の分類に関しては French の “Uncle Wiggily in Connecticut” 論に準拠するも、現在の Eloise が生きる世界を “phony” な世界であると断言することに関しては再考したい。

Eloise と Mary Jane の二人を結ぶのは大学でルームメイトであったことだけではない。

They had an even stronger bond between them; neither of them had graduated. Eloise had left college in the middle of her sophomore year, in 1942, a week after she had been caught with a soldier in a closed elevator on the third floor of her residence hall. Mary Jane had left—same year, same class, almost the same month—to marry an aviation cadet stationed in Jacksonville, Florida, a lean, air-minded boy from Dill, Mississippi, who had spent two of the three months Mary Jane had been married to him in jail for stabbing an M. P.（28-29）

二人とも、戦時中に兵士と恋に落ちたことで、大学を中退しているのである。上の引用で Eloise が1942年に彼女が大学2回生の時に出会った兵士とは、彼女が “nice” な世界を共に生きた Walt（作中で彼のラストネームが言及される

ことは無いが、Glass 家の Walter であると考えられる) のことである。田中によると、彼女が Walt と出会った年、Walt が日本でストーブの爆発事故で死んだ年、そして現在の Ramona の年齢を考えると、Eloise は Walt が戦場から帰還するのを待たずして Lew と結婚したことになるという (田中、『サリンジャー イエローページ』90)。一方、Mary Jane の兵士との結婚生活は3ヶ月しか続かず (そのうち2ヶ月間夫は牢にはいていたので実質1ヶ月間の結婚生活である)、物語の冒頭で丸一日の休暇を取ることが難しいことや、Eloise に “career girl” (45) と呼ばれていることから、恐らく戦後は結婚をせずに職業婦人として生きていると思われる。いずれにせよ、酒と煙草で気を紛らわせなければ生きていけない二人の女性の生き方を決定付けたのは戦争なのである。

Eloise の “nice” な世界とは Walt の humor に溢れた世界のことである。Eloise は、Walt は「自分が出会った中で唯一本当に私を笑わせてくれた人」(41) で、会って話す時は勿論のこと、電話でも手紙でも彼女を笑わせてくれたと言う。Franny and Zooey の “Zooey” の中でも、母親である Bessie Glass は Walt のことを “her only truly lighthearted son” (68) だと言っている。

Walt の humor を表すエピソードの中でもとりわけ印象的なのは作品のタイトルになっている “Uncle Wiggily” である。

“Once,” she said, “I fell down. I used to wait for him at the bus stop, right outside the PX, and he showed up late once, just as the bus was pulling out. We started to run for it, and I fell and twisted my ankle. He said, ‘Poor Uncle Wiggily.’ He meant my ankle. Poor old Uncle Wiggily, he called it.... God, he was nice.” (42)

“Uncle Wiggily” とは Howard Garis の童話の兎のことで、Walt は足首を捻った Eloise をこれに掛けて “Poor old Uncle Wiggily” と呼んでいるのだが (French, *J. D. Salinger* 38)、このエピソードは Eloise にとって大切な思い出というだけではなく、作品のタイトルになっていることから、作品世界にとっても重要で

あると考えることが妥当である。

このエピソードで注目すべきことは、足首を捻って痛い思いをしている Eloise を、Walt が humor によって救っている、もしくは救おうとしているということである。このことは“*For Esmé—with Love and Squalor*”における語り手と Esmé の humor を巡る議論を想起させる。

Esmé は過去に、亡き父に自分には humor のセンスが無いので人生に向き合う準備がまだ出来ていないと言われたことを語り手に話す。これを聞いて語り手は「humor のセンスは本当の危機の時には何の役にも立たない」(148) と述べるが、これに対して Esmé は生きる力としての humor の重要性を主張する。

“Father said it was.”

This was a statement of faith, not a contradiction, and I quickly switched horses. I nodded and said her father had probably taken the long view, while I was taking the short (whatever *that* meant). (148)

語り手は表向きには、「長い目で見ると」そうだ、と同意しているが、ここには、イギリス人である Esmé とアメリカ人である語り手の humor に対する姿勢の違いが際立っていると考えることも出来る。注目すべきは、両作品において、humor には辛い経験を乗り越える為の力があると示唆されていることである。

先に引用した“*Uncle Wiggily*”のエピソードの後、Eloise と Mary Jane の会話の話題は、専ら humor に関するものになる。夫の Lew には humor のセンスが無いこと、人生 humor だけでは無いと言う Mary Jane に対して Eloise は“*if you’re not gonna be a nun or something, you might as well laugh.*” (43) と生きることにおける humor の大切さを強調する。そして引き続き、Walt の humor にまつわるエピソードを語る。

本作における French の言う“*nice*”な世界とは Walt の humor に支えられた世界であり、“*phony*”な世界とは、Holden 的大人たちの「いんちきな」世界というよりは、Walt が表す本物の humor を欠いた世界のことなのではないで

あろうか。戦争で Walt を失った悲しみを癒してくれる本物の humor を夫の Lew は持っていないことが Eloise の現在の生活を荒んだものにしており、必要としているのにも関わらず得られない humor の代りに酒と煙草で気を紛らわせているのである。Eloise の戦後の人生をより困難なものにしているのが、Walt の死に方と、娘 Ramona の存在である。

Eloise は夫に「Walt という気の利いたことを言う兵士」(47) と付き合いただけを告げている。Walt が死んだことは告げておらず、その積もりもないと Mary Jane に言い、もしも告げるとしたら「戦死した」(“he was killed in action”) (48) とする積もりだと言う。実際 Walt が死んだ時の状況とは、本作と *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour—An Introduction* (1963) でも触れられている通り、日本駐屯中に日本製のストーブの梱包作業中にそれが爆発したからであった。この事実を Eloise は決して口外しようとせず、当初は Mary Jane にすら話そうとしなかった。Eloise は愛すべき男性を戦争で亡くしただけではなく、その死の原因が1945年の秋、終戦を迎えた日本でストーブの爆発事故で命を落とすという、到底 heroic なものではないことにも精神的に苦しめられているのである。当然のことであるが、Walt 亡き後、彼女の苦痛を humor で癒してくれる人はおらず、このことが、彼女の戦後の人生をより生き辛いものになっているのである。

次に Eloise の戦後の人生をより困難にしている娘 Ramona について考察する。彼女は久しぶりに会った Mary Jane の前で体中を搔くことを止めず、Mary Jane の申し出たキスを拒み、Jimmy Jimmereeno という空想上の恋人を持っている。Ramona の落ち着きない振る舞いは彼女が精神的に健全な状況ではないことを示しており (French は Ramona を Eloise の “only one wan child” [*J. D. Salinger* 39] と表現している)、これは彼女を妊娠中だった母親 Eloise の状態と関係するのかもしれない。作品中 Eloise が “‘She [Ramona] looks like Lew. When his mother comes over, the three of them look like triplets.’” (35) と述べていることから Ramona は Lew の子であると考えるのが妥当かも知れないが、田中が『サリンジャー イエローページ』の中で作中の出来事が起こった年を整理して指

摘している通り、彼女は Lew の子ではない可能性がある (90-91)。Ramona が Lew の子ではなく Walt の子である可能性を示唆するのは Eloise が Mary Jane に語って聞かせる Walt との思い出話の中にも見いだすことができる。

“Well, he sort of had his hand on my stomach. You know. Anyway, all of a sudden he said my stomach was so beautiful he wished some officer would come up and order him to stick his other hand through the window [...]” (43-44)

“fair” なことを好む Walt が片手は Eloise のコートの上から（そしてその下にはカーディガンを着ている）腹の上に置き、もう一方は汽車の窓から出して寒さや危険にさらすことで初めて両手の均衡が取れると言うほど、彼女の「腹が美しい」とは何を意味するのであろうか。それは本作を原作にした映画 *My Foolish Heart* (1950) の脚色のように、この時点で Eloise は Walt との子を宿しており、それが Ramona であるという解釈が可能だということである（田中、『サリンジャー イエローページ』91）。この解釈を採用すると、Eloise の戦中戦後の人生は以下のようにまとめることが出来る。1942年に Walt と出会い、Ramona を妊娠し、戦争により二人は引き裂かれる。身重の状況で Walt の帰還を待つことが出来ず、お腹の子の父になってくれる夫を探し、Lew と結婚する。このように見ると Eloise は Ramona の妊娠中、ずっと大きなストレスを感じていたと考えられ、これが Ramona の奇行の原因と考えることは出来ないだろうか。

奇しくも、Ramona も母 Eloise と同様に一人目の恋人 Jimmy Jimmereeno を事故で失い、直ぐに次の恋人 Mickey Mickeranno を見付けている。これを知った Eloise は動揺したのか、金切り声を上げ、力尽で Ramona をベッドの中心で寝かせようとする。Eloise が涙ながらに Walt との思い出の “Poor Uncle Wiggily” を繰り返し口にするのは、この出来事の直後である。Eloise は想像の世界であるとは言え、娘も自分と同じ道を歩んでいることに衝撃を受け、衝動的な行動を取ったのだと考えることが出来る。

このように見ると、Eloise が Walt 亡き後 Holden 的 “phony” な世界に「堕ちた」という解釈は実は当たらず、彼女も戦争によるトラウマと向き合う男性登場人物たちと同様に戦後の生き辛い世界を生き抜こうとしているのである。

4. まとめ

本稿では *Nine Stories* の “A Perfect Day for Bananafish” と “Uncle Wiggily in Connecticut” を取り上げ、そこに描かれている女性たち、とりわけ French の論考以降 Holden 的 “phony” な世界に生きていとされてきた女性たちに注目した。

“A Perfect Day for Bananafish” では移り気で夫に無関心であると解釈されてきた Muriel だが、実は戦争によるトラウマを抱える Seymour を支えようとしていると解釈が出来ること、そして Seymour の求める “innocent” な世界を与えることをしていないとされる Sybil については、彼女の行動と発言を再読すれば、Seymour に懐き、彼を気遣う優しさのある少女の姿が前景化されることを指摘した。

“Uncle Wiggily in Connecticut” については、Eloise は Walt を失った後、酒と煙草に気を紛らわせ、Muriel 同様 Holden 的 “phony” な世界に「堕ちた」と解釈されてきたが、戦争で恋人 Walt と、彼が表す本物の humor を奪われ、humor を解さない Lew と、Walt の忘れ形見であり、かつ彼女を妊娠していた時の辛さを思い起こさせる Ramona と共に生き辛い戦後の世界を何とか生き抜こうとしている女性として描かれていると解釈した。

以上、考察してきたように *Nine Stories* における、Salinger 文学の特色であるとされる “phony” な世界とは Holden 的なそれとは異なり、“phony war”、つまり世界中で人々を無益な死に追い遣り、生残った者には癒えるこのとないトラウマを残した第二次世界大戦後の世界を意味しているのである。とりわけ、本稿で考察した “A Perfect Day for Bananafish” と “Uncle Wiggily in Connecticut” は “phony war” の犠牲者としての女性登場人物たちの姿を描いている作品と言うことが出来るだろう。

Biography

- Alsen, Eberhard. *A Reader's Guide to J. D. Salinger*. Westport, Connecticut: Greenwood, 2002.
- Bloom, Harold, ed. *Bloom's Modern Critical Interpretations: J. D. Salinger's The Catcher in the Rye, New Edition*. New York: Bloom's Literary Criticism. 2009.
- . *Bloom's Modern Critical Views: J. D. Salinger, New Edition*. New York: Bloom's Literary Criticism. 2008.
- French, Warren. *J. D. Salinger*. New York: Twayne, 1963.
- . *J. D. Salinger, Revisited*. Boston: Twayne, 1988.
- Rebel in the Rye*. Directed by Danny Strong, performed by Nicholas Hoult, IFC Films, 2017.
- Salinger, J. D. "For Esmé—with Love and Squalor." 1950. *Nine Stories*. pp. 131-173.
- . *Franny and Zooey*. 1961. London: Penguin, 2010.
- . *Nine Stories*. 1953. New York: Back Bay Books/Little, Brown, 2001.
- . "A Perfect Day for Bananafish." 1948. *Nine Stories*. pp. 3-26.
- . *Raise High the Roof Beam, Carpenters and Seymour—An Introduction*. 1963. London: Penguin, 2010.
- . *This Sandwich Has No Mayonnaise & Hapworth 16, 1924*. (金原瑞人訳、『このサンドイッチ、マヨネーズ忘れてる・ハプワース 16, 1924 年』. 新潮, 2018.)
- . "Uncle Wiggily in Connecticut." 1948. *Nine Stories*. pp. 27-56.
- Slawenski, Kenneth. *J. D. Salinger: A Life*. New York: Random House, 2011.
- 田中啓史. 『サリンジャー イエローページ』. 東京: 荒地出版, 2000.
- . 『ミステリアス・サリンジャー 隠されたものがたり』. 東京: 南雲堂, 1996.
- . 『「ライ麦畑のキャッチャー」の世界』. 東京: 開文社, 1994.
- 村上春樹, 柴田元幸. 『翻訳夜話 2 サリンジャー戦記』. 東京: 文藝春秋, 2017.
- 『MONKEY』 vol.19 Fall/ Winter 2019-20. スイッチ・パブリッシング.
- 『monkey business』 vol. 3 Fall 2008. ヴィレッジブックス.